

# 次郎長

題字 竹内宏

次郎長翁を知る会  
会報「次郎長」  
33号  
平成27年6月13日発行  
発行/編集  
次郎長翁を知る会  
会長 山田健司

諸田玲子氏「波止場浪漫」出版記念会に七百名

## 各界の協力で次郎長を全国に発信

次郎長翁を知る会会長 山田 健司

平成27年1月31日、諸田玲子氏『波止場浪漫』出版記念の「講演と鼎談と音楽のつどい」には、予想をはるかに超えて清水マリンビルに7百余名の人たちが集まった。

思えば次郎長は明治6年に三保松原近くの宇池尻におよそ2千坪余の開墾を行った。明治7年には県令大迫貞清及び山岡鉄舟の勧めで富士裾野の曠野76町歩



の開墾を開始して、明治17年まで続けた。また清水、横浜間の回漕には蒸気船が必要と、廻船問屋衆に力説して清水港の発展に奔走した。明治12年には港橋、明治19年には富士見橋が架橋され清水町と波止場とは頻繁となった。船宿「末廣」も開業し、多くの人々が訪れるようになった。これら次郎長の足跡は、世界文化遺産に登録された富士山と三保の松原、その懐に抱かれた清水港、そして船宿「末廣」と、奇しくも次郎長という点が一本に繋がっているように見え、不思議な縁を感じた。

本会の目的は「郷土の生んだ次郎長の真の人間像を探り後世に継承することにある。今回の出版記念会は、この意味から企画した。



700名が参加した「波止場浪漫」出版記念会（清水マリンビル）

次郎長の末裔で静岡市出身の作家諸田玲子氏の魅力と人柄で、日本経済新聞社並びに日本経済新聞出版社をはじめ鈴与、清水銀行、はぐろもフーズ、そして清水経済人クラブ、清水港利用促進協議会、静岡商工会議所など多くの地元企業の皆さま方のご協力とご支援があった。

勇壮な次郎長太鼓で始まった出版記念会は三部構成で、一部は諸田玲子氏の講演、二部は小説に登場するヒーローの曾孫の植木豊氏と新聞連載の挿絵画家横田美砂緒氏の鼎談。三部は由比の小倉食品社長が率いる「シュリンプス」の演奏を楽しんだ。

フィナーレは軽快な「ちびまる子ちゃん音頭」のリズムにのって、諸田氏のパフォーマンスで会場はいつきに沸騰した。また、横田美砂緒氏の挿絵原画展も開かれ、熱心に観賞して好評だった。

遠く東京や名古屋からきた人は「清水は元気があっていいところですね」「清水らしさがすばらしかった」といってくれた。地元の人たちは「オール清水って感じだった」「次郎長さんを身近に感じることができた」と率直な感想を述べてくれた。

地元企業と多くの市民に支えられ、大盛況のうちに会は終わった。諸田玲子氏から「すばらしい出版記念になりました」と感謝をこめたお礼があった。

企画は成功し次郎長を全国に発信できた。それを祝福するように富士山の雄姿が清水の町と清水港を見守っていた。

## 平成二十六年 春の探訪ツアー

# 相良油田を訪ね次郎長の社会事業を検証する

平成二十六年四月九日春の探訪ツアーは前年秋の富士大洲次郎長開墾に続く、「次郎長の社会事業の検証」第二弾として相良油田を取り上げた。

明治五年二月、遠州相良において元幕臣の村上正局まさむねによって発見された相良油田は翌年、石坂周造の手により事業化された。この油田開発に次郎長も関わったことについては既によく知られている。研修旅行では、油田をとりまく人物にスポットを当て、その関係をも解く旅となった。

旅の最初は美濃輪稲荷神社。「次郎長翁知る会」のこれまでの探訪ツアーで、地元の人を訪問することは意外にも初めてのこと。以前会報二十一号にて、明治十三年に寄進された神社を囲う玉垣の中に山本長五郎（次郎長）と身内や子分の名が在ることを記したが、先ず此処に立ち寄った理由は、この日のテーマとなる人物の寄進名も在ることが新たに確認されたからである。同所では後述する子分の当目の岩吉こと久保山岩吉と、横浜港の茶売込み商人である村松吉平の玉垣を見学する。また同神社内には盟友であった芝野栄七（通称「芝栄」）の寄進物も数多く、明治の次郎長を支えた代表的人物として紹介し、その繋がりを以て次は両者ゆかりの鉄舟寺へと進ん

だ。鉄舟寺はもともと久能寺という古刹であったが幕末には荒廃状態となっていた。それを惜しんだ山岡鉄舟が再興を発起。次郎長が手助けし、両者亡き後は芝栄が引き継ぎ鉄舟禅寺として復興させた。境内にある初代芝野栄七像を拝観し清水を後にした。

次に赴いたのは焼津浜当目にある那閉神社なへ。神社の本殿向って左奥に鎮座する稲荷社は、この地の出身者であり次郎長の子分の当目の岩吉が美濃輪稲荷から勧請したものと云われている。岩吉は、晩年の次郎長を補佐し、次郎長の葬儀には委員長を務めるなど、三代目おちようを助け次郎長亡きあとの清水一家を牽引した。岩吉の菩提寺は神社のすぐ西隣にある恵目山弘徳院で、本堂の軒下には山岡



久保山岩吉を墓参（焼津浜当目・弘徳院）

鉄舟の揮毫である寺号額が掲げられている。今年が没後百年に当たる為、参拝が旅の目的の一つであったが、この日が偶然にも命日で、奇譚な巡りあわせにツアー参加者誰もが驚愕した。参拝を終え昼食を済ませた後は目的地の相良を目指した。途中の静波海岸付近から旧田沼街道に入る。そのあたりはかつて川崎という小さな湊まちで、天保十三年の次郎長二十五歳の駆け出しの頃、喧嘩で半死の目にあつた漁村である。勝間田川の河口付近にあつた古い湊町の風情を車窓から偲んだ。

### 油田のあゆみ

目的地の相良油田の里公園に到着すると、資料館にて紅林館長の油田についての詳しい解説に加え、園外の民家傍に今も湧き出る石油の井戸へと案内していただき、大変有意義な時間を過ごした。

資料館で学んだ油田の略歴から石坂周造周辺と相良油田のあゆみを記す。

明治五年（一八七二）二月、村上正局が海老江の沢合で原油の露頭を発見し、同年三月静岡学問所教師のE・W・クラークが石油と判定。七月には東京石油会社の石坂周造が相良油田に進出。同会社の相良支社を設置し翌

年の明治六年の二月には手掘り掘削を開始する。しかし、開始当初に雇った米国人技師のダンへの見込み違いと解約違反金の支払い等が原因で石坂の会社は倒産状態となり、明治八年から明治十二年の間、油田の経営が一時元薩摩藩の島津候の手に渡った。しかし山岡鉄舟の養子となった石坂の長男宋之助が米國で石油探掘技術を学んで帰国した明治十一年あたりから、石坂周造も相良の天香閣に居住するなど再び本腰を入れて石油探掘に全力を注ぐようになる。石坂を資金面で支えた勝海舟と山岡鉄舟もこの頃、油田視察に訪れ激励している。明治十四年には「相良油田会社」を設立。最盛期の明治十七年には油出量、年産七百二十一・六キロリットル（ドラム缶で約三千六百本分）当時の額で四万円を産出し従事者は約六百人となった。

以降は年々産出量が減り、明治三十年には石坂本人も相良から東京へ移転し、新潟方面に新たな油田を求めると執念を燃やすが、明治三十六年七月、「石油王」と呼ばれた男は七十二年の波乱万丈の死を遂げた。（以上館内資料より）

### 油田をめぐる人々

石坂の事業は、これまで石油に依存し発展してきた我が国のエネルギー事情を考えるならば、極めて先見性のあるものであった。しかし先進過ぎるベンチャーにはリスクも高く資金も多額となった。妹が石坂の妻であり義兄の関係にある山岡鉄舟は、石坂の石油事業



春の探訪ツアーに参加したみなさん（相良油田資料館）

を援護するために多額の借金を背負い生涯貧乏であったという。山岡と共に石坂の石油会社設立初期を支えた人物に小池詳敬がいる。京都の上加茂の社家の出の小池は、国学の素質から新政府に登用され弾正台という風俗や密偵を監視する厳しい役柄であったが、明治六年に突如として退職し石坂の石油会社の資金集めの為、株主獲得に奔走した。石油事業は新政府も支援したと見え、株主には九条道孝をはじめ公卿・華族にも高い関心があり、小池の信用で一株百円の株が総員二百一名、総株高千八百六十五株を集めた。しかし不遇にも小池は、明治九年に死去してしまう。ところで当時、小池のところに若き天田五郎が寄宿していた。小池は、肉親捜しを兼ねて

天田五郎を株主獲得の西国巡りに帯同させていた。山岡鉄舟は親父があった小池を通じて天田五郎を知り、後に世話役を引き継いだものと思われる。

小池亡きあとは、美濃輪稲荷の玉垣で前述の村松吉平が資金面で多額を援助した。

森町の豪商の家に生まれた吉平は慶応三年横浜に出て茶商の修行をし、明治五年に自ら元浜町二丁目に出店。故郷森町を地盤とした茶の売込商人となる。遠江産の茶と彼の人気はたちまち高まり、横浜の有力茶商の一人となった。森町の茶はおそらく秋葉街道を通過して相良港から出されている。そして美濃輪稲荷神社に縁があるのは清水の廻船問屋を経由して回漕した可能性をうかがわせるものであり、次郎長との接触もこの時期にあったと筆者は想像する。

吉平が石坂周造の相良の石油採掘事業を援助した理由は、禅の師と仰ぐ山岡鉄舟からの協力依頼と相良の発展が故郷の発展に繋がるという想いからである。しかしその志も半途にして病に倒れ、明治十四年四十歳の若さで没した。森町の庵山には鉄舟による『村松君の碑』が、相良の小堤山公園には石坂による顕彰碑が建つ。

そして村松吉平亡きあとの三人目に油田事業を支えたのが次郎長である。

次郎長が直接相良へ出向いたのは明治十二年の頃で、追分羊羹本舗の府川家には鉄舟が油田の協力要請に次郎長へ宛てた手紙も残っている。小池、村松らの尽力が実り油田の産

出量、金額ともに最盛期へと向かうという時期である。

『相良史』によれば、次郎長の相良での逗留先は、波津の長野余蔵先。同町の山崎寅蔵の長女みとの初節句に次郎長が手製の雛人形を贈ったと記されている。言伝えでは富士開墾同様、油田の工夫にも多くの囚人が働いたといわれているが、次郎長が油田事業に具体的にどう携わったかは地元の相良の資料には無い。

唯一、昭和三八年七月十二日付で清水の郷土史家の法月吐志郎氏が次郎長研究者でもある子母澤寛氏に宛てた書簡に、「周造の妻がい子が山岡鉄舟及び泥舟の妻と実姉妹の間柄であったので、鉄舟もこの石油事業には援助したようで、静岡清水でも石油はブームで、この石油には投資家も相当あったのでした。おそらくその関係で次郎長も相良へ出かけて寄寓したりしました。」とあり、次郎長が現場の視察と投資家との仲立ちも兼ねて、相良を往復していたことを暗示している。

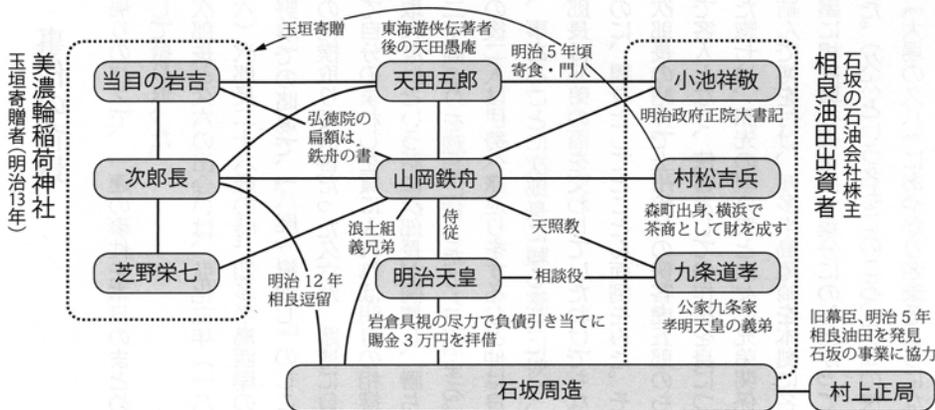
### キーマンは鉄舟

油田の歴史を追う中で、次郎長がどのタイミングで、どのような状況下で関わったかを整理し、相良油田を取り巻く人物関係を図にした。（下図）

相良油田のキーマンは紛れもなく山岡鉄舟であり、次郎長も鉄舟ファミリーの一員としてこの事業に協力したというのが正しい見方である。相良油田が自ら仕掛けた事業では無

いにせよ、この時期の次郎長は、富士の開墾、波止場の構築、相良油田という三つの大事業を同時にこなしていたことになる。やがて『事業家』として伝説化されるに値する働きだ。表社会の人間となって十年、それは還暦を迎えた次郎長が遅咲きではあるが、人間的にも脂がのり最もエネルギーに眩しく光を放っていた時期なのである。（中田）

美濃輪稲荷神社と相良油田を取り巻く人物関係図



## 平成二十六年 秋の探訪ツアー

# 保下田の久六追討の半田乙川と初代お蝶さん墓参

平成二十六年十一月十二日秋の探訪ツアーは安政五年大晦日に名古屋市中の長兵衛宅で亡くなった初代お蝶さんの墓参と、次郎長一行を裏切った保下田の久六への追討を果たした地、半田など東海遊侠伝に書かれた一連の物語の舞台となった地を巡りました。

名古屋市中種区の平和公園内に眠る初代お蝶さんの墓参は、当会による墓石修復事業の完成供養に平成九年十二月二十日に訪れて以来、十七年ぶりのこと。



初代お蝶さんを墓参 (名古屋市・平和公園)

名古屋市の平和公園は太平洋戦争の空襲で焦土化した街を、都市計画で再興する際に集合墓地として作られた霊園で、広大な敷地に各寺院が町割りの様にブロック化されているので、お墓一基を探すのも困難であるが、管理事務所を訪ねると「お蝶さんの墓だね。その角を曲がってすぐだよ」と即答で返ってきた。

地元の方々が関心を持ち続けてくれているのは有り難く嬉しいことです。お陰で迷わず無事に参拝を済ませることができました。

市内を観光しながら名古屋城南西の「巾下の長兵衛宅」のあった西区幅下付近を車窓から眺め、後半の目的地の半田市乙川(なわて)をめざします。

車内では資料を手に東海遊侠伝に書かれた、お蝶さんの名古屋での病死から保下田の久六襲撃までのあらましと関係する人物の予習を行いました。そして半田市乙川の光照寺に到着すると、半田市の郷土史家でルポライターの西まさる氏が出迎えてくださり早速境内で『久六殺し』の解説が始まりました。

### 現地を歩く

西氏は、地元の伝承をくまなく聞き取り、時の状況や博徒間の対立関係等を考察して徹

底的に『久六殺し』の実状を調査されました。

特に、事件の起きた安政六年(一八五九)の地形に最も沿った明治二十一年大日本帝国陸部測量地図から、次郎長が保下田の久六を待ち伏せた場所から斬りつけた場所、久六が瀕死の重傷を負いながら村中を逃げ回ったルート、次郎長逃走ルートなど、詳細を地図上に記した資料を手元に各所を丁寧に解説しながら案内してくれました。

(次ページ地図)

またこの乙川村は、次郎長の養女となった山下燕八郎の子、山下けんの出身地であり、半田市内のミツカンの中埜酒造と国盛の山泉酒造が、明治初期に合同会社「中泉」の名で販路を求めて清水へ進出を図った際に次郎長が世話をした事実がある。

その他にも次郎長は幾度となく半田を訪れていた模様で、「次郎長と半田は深い縁で繋がっている。これを機に半田と清水の交流を更に深めたい」と西氏から嬉しい提案もありました。

更に西氏によれば、博徒時代の次郎長は関西方面への逃走あるいは帰還の際に知多半島を隠れ蓑の様に使い動き回った形跡があるという。尾張知多にはまだまだ見どころが眠っている。

### 事件の背景

帰りのバスで、一連の事件を本日のまとめとして振り返った。

次郎長と久六の出会い、弘化三年(一八四六)次郎長二十六歳の時。知多半島西岸の大野湊での賭場で、『八尾ヶ嶽惣七』のしこ名の相撲取りで侠客だった久六が、賭博に負けて自分のまわしを質に入れば明日の相撲が取れないという話に次郎長が同情し、勝ち金三十両余りを惣七に貸したことに始まる。その後二人は伊勢へ旅巡りをするなど仲は良く、事あるごとに次郎長に頼る惣七に対し、次郎長は兄弟の盃を交わしていたわけでもないのに、親友としてとことん面倒をみた。その次郎長の紹介で上州館林の侠客虎五郎のもとで客人となり、侠客としての作法を身につけた惣七は、旅先の親分衆と次々に兄弟関係を結んで博を付け、知多半島竜崎を本拠に名古屋に相撲興行権を持つ親分にのしかがっていた。(久六という名もこのころ、伊豆の侠客『大場の久八』にあやかり名乗るようになったともいわれている)

久六にとって次郎長は、大恩人のはずだった。しかし久六は、お蝶が病に伏せて非常事態にある次郎長達に対し、本来なら真っ先に恩返しすべきであるにも関わらず、近くで耳に入れていながら援助も一切の見舞い挨拶すらも入れなかった。

それはおろか、十手持ちという二足の草鞋の立場を利用して、次郎長を投獄しようとする

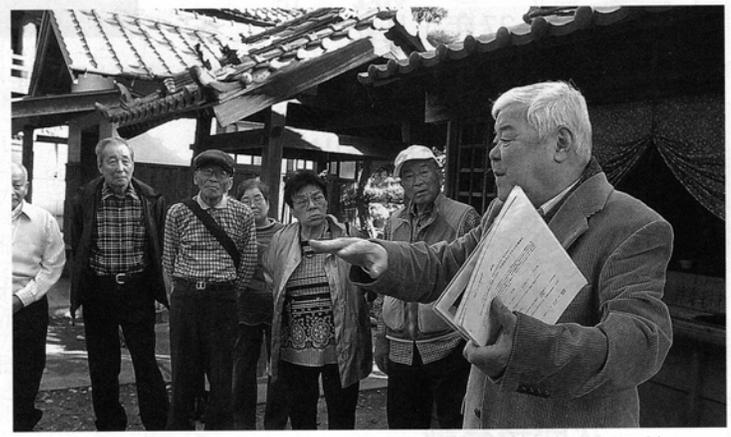
組んだのである。結果、巾下の長兵衛が身代わりとなって投獄され、長兵衛は久六の指示によって口封じに殺された。

瀬戸、名古屋でのひもじい思い。お蝶の死。長兵衛の獄死を経て、次郎長の久六への友情は怨恨へと変わっていったのである。この出来事を天田五郎は、東海遊侠伝の第六話の見出しに『揮鐵拳長五大(だい)闇(くら)囚獄(ご)の大騒ぎ鉄の拳を振上げる次郎長(じ)』(囚獄の大騒ぎ鉄の拳を振上げる次郎長)抱恨心久六偏誣(へんご)親友(しんゆう)を欺(あざむ)きました久六に恨みを抱く』と題している。

久六の変身ぶりの理由には、急成長売出し中の次郎長の、尾張・伊勢方面への進出が思わしくない者の働きが背後にあるように思われる。これはその後の次郎長の身に起きる数々の事件や抗争に現れている。

先ず伊豆の大場の久八が、兄弟分の久六の復讐と称し子弟を富士の大宮に集めた。しかしこれはおそらく久六残党と常滑一家の呼びかけに兄弟の義理として応じて動いたまでに過ぎず、脅した格好で次郎長とは対決していない。

その半年後の四月、久六を討ったその刀を四国の金毘羅さんへ奉納代参した石松は、帰路に滋賀見受山の鎌太郎から預かったお蝶さんへの供養金を、遠州都田の吉兵衛兄弟に騙し取られた挙句、惨殺された。この時、吉兵衛は石松の首級を常滑の兵太郎のもとへ送り届けようとして諫められている。久六と常滑の兵太郎は義兄弟。尾張での久六の成長の裏にはおそらく常滑一家の後ろ盾があったに違いない。つまり、石松殺害は単に都田一家に



地元の郷土史家西まさる氏から説明をうける(愛知県半田市・光照寺)

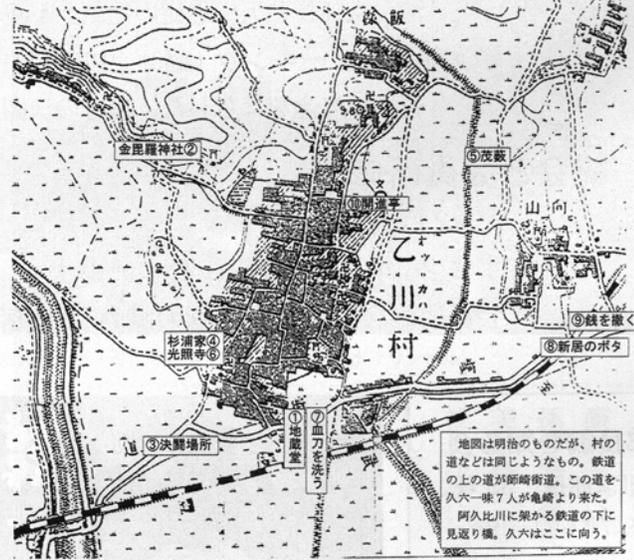
よる窃盗殺人ではなく、常滑一家の指示による計画的な殺人だったと筆者はみている。

石松を殺した報復を恐れた吉兵衛は、大場の久八の下で義兄弟の伊豆(赤鬼)の金平に次郎長殺害を依頼し、都田一家と金平一家の甲冑で固めた集団が船で清水を襲撃する。これは次郎長が留守中に未遂に終わっている。

年明けの一月十五日、フク中毒で倒れる清水一家の噂に油断して乗り込んできた都田一家を、追分の籠屋で殺害し、その両腕を石松の墓前に届け置き、弔いを完結させた。この後も都田一家の残党が赤鬼の金平と報復を企てる動きがあったが、次郎長は金平の乾爺で伊勢古市の丹波屋伝兵衛へ増川仙右衛門を仲

乙川村に遺る清水次郎長の足跡と伝承地点

次のような伝承(物証も)が乙川村の各地に遺っている。  
★安政6年(1859)6月19日の次郎長たちの足跡①~⑨  
★決闘に参加は、次郎長・大政・森の石松・緒川の勝五郎。隠密役に大野の鶴吉。



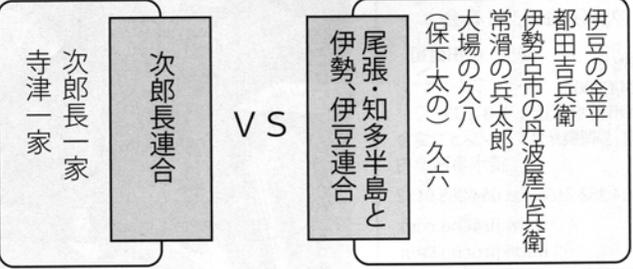
半田市の郷土研究家でルポライターの西まさる氏が作成した「乙川村に遺る清水次郎長の足跡と伝承地点(部分)」

介に和睦を申し入れ、伝兵衛のお膳立てにより四月下旬に菊川にて、ようやく一連の報復戦は手打ちとなった。

手打ち式には次郎長一家と寺津一家の連合軍。それに対し、金平をはじめとする伊豆周辺の親分衆、黒駒勝蔵らが連なり、調停役、監査役、そして幹事の丹波屋を含め総勢四百名余となった。

久六の背後で動いていた常滑一家は、東海遊侠伝には手打ち式にその名が記されておらず、最後まで表に登場はしてこないが、式の参列状態によれば、次郎長が進出への足掛かりもしくは逃走の拠点とし懇意にしていた三河寺津一家との連合勢力と、それを包囲する

地図は明治のものだが、村の道などは同じようなもの。鉄道の上の道が新橋街道。この道を久六一隊7人が亀崎より来た。阿久比川に架かる鉄道の下に見張り籠。久六はここに向う。



尾張・知多半島と伊勢、伊豆、甲州の連合勢力のという図式が見えてくる。(右図)

久六の出世のきっかけは次郎長との出会いだったが、常滑と組み自らも勢力をもつようになる。次郎長の存在が煩わしくなってきた、というのが久六の裏切りの動機ではないかと思われる。(中田)

尚、この話の続編として平成二十七年一月十七日に『石松の無念をはらした都鳥どの追分の決闘! その道を通る』と題して、次郎長ガイドウォークを行いました。また本年度の秋の研修旅行は伊豆方面・大場の久八を訪問する予定です。これらの報告は併せて次号に掲載いたします。

# 平成26年度のあゆみ

## 次郎長 122 回忌供養

26年6月12日・梅蔭禅寺

## 「壮士墓」墓参と清掃

秋と春の彼岸に実施

## 「波止場浪漫」出版記念会

27年1月31日

清水マリンビル (700名参加) ※本号1面

「波止場浪漫」出版記念会スタッフのみなさん (清水マリンビル)



## 次郎長史跡探訪ツアー

●春季 4月9日 (22名参加)

相良油田と明治の次郎長を支えた人々  
美濃輪稲荷>焼津>相良油田資料館

※本号2~3面

●秋季 11月12日 (25名参加)

初代お蝶さん墓参と仇敵  
保下田の久六との決闘場を訪ねる  
名古屋市平和公園>半田市

※本号4~5面

## 次郎長巷談

清水港船宿記念館「末廣」にて開催 (5回・116名参加)

●連続講座 (講師: 山田健司)

「清水次郎長と天田愚庵の物語」4回

●次郎長ウォーキング (講師: 中田元比古)

「石松の無念をはらした、追分の決闘を辿る」末廣>しみず道>追分



## 総会と会員研修会

第22回通常総会

平成26年6月18日・清水テルサ

会員研修会「次郎長映画の魅力」(講師: 斉藤隆氏)

次郎長翁を知る会

会報「次郎長」33号

平成27年6月13日発行

発行/編集

次郎長翁を知る会

会長 山田健司

連絡先

〒424-0806

静岡市清水区辻 1-1-3-103

(公財)静岡観光コンベンション協会  
清水事務所内

Tel 054-352-2188 Fax 054-388-9182

www.jirocho.com

info@jirocho.com



なごやかな雰囲気(26年6月18日)